

**生徒エージェンシー育成のための小学校社会科授業構成理論とその評価
創造的写真読解モデルを活用した第4学年「わたしたちの県（兵庫県）」を事例に**

小原 嘉夫
Yoshio Ohara

要旨

本研究は、「どのような写真読解プロセスが、OECD によるラーニング・コンパス（Learning Compass）2030 の生徒エージェンシー（Student Agency）育成に繋がるのか」を、小学校社会科を事例に明らかにしたものである。小学校社会科における写真読解の先行研究には、向山洋一の「雪小モデル」のように正確な読解や吟味的読解に迫る読み取りフレームワークは存在するものの、生徒エージェンシー育成には結び付きづらい。そこで本研究では、「正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で写真を読み取っていけば、生徒エージェンシー育成に繋ぐことができるであろう」という仮説を設定した。仮説検証のために、生徒エージェンシー育成に繋がる創造的写真読解モデルを活用した授業を開発し（研究Ⅰ）、小学校4年生に対して実践した授業の効果検証を行った（研究Ⅱ）。

キーワード：小学校社会科、生徒エージェンシー、創造的写真読解モデル、雪小モデル

I. 問題の所在と研究の目的

1. 生徒エージェンシーの重要性

これからの社会は、より VUCA（Volatile：変化のしやすさ、Uncertain：不確実さ、Complex：複雑さ、Ambiguous：曖昧さ）な時代になると予想されている（＊文献1）。このような時代に生きる児童たちが明るい未来を創造するためには、どのような教育が必要であろうか。

OECD は、次代に向けてコンピテンシー（資質・能力）を再定義する「Education 2030 プロジェクト」で示された新たな学習枠組みである「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」の中で、「生徒エージェンシー」（Student Agency）を中心的な概念と位置付けている（＊文献2）。白井（2020）は、生徒エージェンシーを「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」とであると解説している（＊文献1）。

一方、社会科で求められる読解力は、市民的な資質・能力の育成に必要な読解力である。市民的な資質・能力には様々な定義があるものの、前述の生徒エージェンシーと重なるところが大きい。そのため、社会的な見方・考え方の視点に立った様々な資料の科学的な読解を通して、市民的資質・能力の具体である意思決定や社会参画、さらには社会変革に繋がる読解力を育成する必要がある。

2. 社会認識だけでなく、社会変革につながる読解力

社会科固有の読解力には、様々な要素がある。その要素の中の1つが非連続型テキストの読解力である。教科書見開き2ページには、連続型テキストを取り囲むように非連続型

テキストが配置されている。そして、非連続型テキストの中でも一番比率が高いものが、写真・イラストである（＊文献3）。そこで、社会科固有の読解力の1つである写真・イラストの読解力育成を本研究の中心的課題とする。

そこで本研究では、エージェンシー育成につながる読解のために、小学校社会科ではどのような写真読解プロセスが必要であるかを明らかにし、そのための読解モデルを開発し、検証することを目的とする。

Ⅱ. 研究の仮説と研究の手順

本研究は、写真読解を題材にして、生徒エージェンシー育成に繋がる小学校社会科授業を開発し（研究Ⅰ）、その効果を検証する（研究Ⅱ）というダブルフェーズのデザインとなっている。

本研究の仮説は、「正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で写真を読み取っていけば、生徒エージェンシー育成に繋ぐことができるであろう。」と設定した。「繋ぐ」と表現した理由は、生徒エージェンシーは1単元で育成するような簡単な概念ではなく、継続的に系統立ったカリキュラムの中でこそ育成できるものであるからである。

研究仮説を検証するために、以下の研究手順を踏んだ。

研究Ⅰ：生徒エージェンシー育成のための創造的写真読解モデルを活用した授業開発

- ①小学校社会科における写真読解プロセスの先行研究を整理する。
- ②写真読解モデルの成果と課題を明らかにする。
- ③②で明らかにした課題を克服するための方法を構築する。

研究Ⅱ：創造的写真読解モデルを活用した授業の効果検証

- ④③によって開発した授業モデルを小学4年生の3クラスで実践する。
- ⑤授業実践を行うことで、開発した授業モデルの有効性を検証する。

Ⅲ. 創造的写真読解モデルを活用した生徒エージェンシー育成につながる授業構成（研究Ⅰ）

1. 先行研究における読解の射程

それでは、社会科における写真読解をテーマにした授業に関する先行研究にはどのようなものがあるだろうか。まず、非連続型テキストの読解方法や授業モデルが掲載されている論文を対象として、4学会（社会系教科教育学会・全国社会科教育学会・日本社会科教育学会・日本地理教育学会）の査読付き論文を対象に先行研究を精査したところ、写真読解をテーマとする論文は125編確認できた。その中でも、須田・中村（1964）による、観察力段階として、素朴的直観・比較・相関の3段階に分類したもの（＊文献4）や、鳥海（1990）による、読み取り能力の発達傾向を分析し、断片的指摘→比較・位置関係から指摘→全体を概観→全体を説明的に把握とまとめ、各学年の発達傾向を掴み、詳細な表にまとめたもの（＊文献5）などの、観察力の発達を対象としたものが見られた。また、鈴木、村山（2016）は、安岡（2009）（＊文献6）の地理写真の読解プロセスの中から、「存在の指摘」「特徴の指摘」「推論的指摘」の3種類に分け、写真資料活用力の読解的

側面の発達プロセスを解明している（文献7）。これらが写真読解プロセスの授業構成論として提示されたものの代表と言えよう。一方、これらに共通するのは、社会認識形成のための、事象に関する正確な読解や、事象の背景までを読み込む吟味的読解までしか射程になっていないことである。

学会誌以外にも目を向けてみよう。写真資料の読解力育成において、先行研究の中から特筆すべきものは、学校現場で活用しやすく詳細に読解プロセスや読解モデルまで記述している向山（1990）（＊文献8）の雪小モデルであろう（表1）。向山（1990）の雪小モデルは、表頭や表側に配置されている社会的な見方・考え方の視点においても写真資料の読解を行う際に効果的である。しかしながら、向山（1990）も、正確な読解や吟味的な読解までが射程と考えられる。

表1 雪小モデル 子どもの意見の分類表

子どもの意見の分類表		1人 最低（ ）：最高（ ）：総数（ ）：	
		目についたこと	くらべたこと
もの・形 ～がある ～が大きい、白い	① 人	A	E
	② 建物		
	③ のりもの		
	④ 山・川・自然		
	⑤ 道具・機械		
	⑥ かんばん		
	⑦ その他		
分布 ～が多い、少ない、いっぱい		B	F
地域的、空間的なこと どこ、どちら向き		C	G
時代的、時間的なこと いつ、何時		D	H
その他		I	

（向山，1990：2）

2. 創造的読解とは

雪小モデルは児童の意見をいくつかの規準によって分類し、それを生かして学習を展開するためのフレームワークである。このフレームワークを教師が持っており、教師の細かな発問により、児童の意見のレベルを向上させ、多様な意見を出させようとしていることがわかる。しかし、児童にモデルを明確に提示しない以上、どのような意見を書けばよいのかが十分には伝わらない。その結果、授業者の授業技量に依拠した教師主導型の展開の域からは脱出できない。学習の自己調整が望まれている今日、児童にモデルを提示し、児童自ら学習に取り組める展開とするべきである。

さらに OECD が目標にしているウェルビーイング 2030 には、明るい未来というゴールが待っている。そのためには、創造的読解が不可欠な要素となる。一方、向山（1990）では、雪小モデルという児童の意見の分類表は提案できたが、生徒エージェンシー育成に迫

る創造的読解にまでは至ることができなかった。よって、雪小モデルの枠組みを継承しつつ、現代に求められている課題に迫った新たなモデルを提案する必要がある。

正確に読解させるためには、ものさしとなる視点がある。社会科の場合、その視点となるものが社会的な見方・考え方である。複数の読解の視点を児童に与えることで、多面的な読解が可能になる。つまり、正確に読解するということは、写真に写っている事柄を様々な社会的視点によって、詳細かつ多様に読み取ることである。

さらに次の段階として、写真に写っていないことや吟味的に写真を読解するクリティカルシンキングの要素も必要になる。他地域や今までの経験との比較や関連という社会的な見方・考え方の視点が必要になる。この吟味的読解は、トリミングされた空間である写真という限られた情報をより正確に読解する場面である。つまり、吟味的に読解するということは、正確な読解で用いた社会的な視点を活用しながら、他地域や今までの経験等と比較し、読み取ったことが正しいのかどうかを確かめ、写真の地域の過去や未来まで探究する段階である。正確な読解・吟味的読解を十分に行った上で、生徒エージェンシー育成のためには、今日的な諸課題を多面的・多角的に読み取り、読み取ったことを関連させながら実行可能な未来のビジョンを提案する創造的読解まで迫った写真読解を行う必要がある。岩田（1991）は概念探究過程から価値分析過程への接続を提案した（＊文献9）。本研究においても岩田（1991）に依拠し、正確な読解・吟味的読解の後に、創造的読解を配置した。よって、創造的写真読解モデルは、正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で構成される。

3. 創造的写真読解モデルと生徒エージェンシー育成との関係

OECD（2018）はラーニング・フレームワークやラーニング・コンパスを用いて、ウェルビーイング 2030 を実現しようとしている（＊文献2）。これらのフレームを活用しながら各教科は教科の固有性を意識したフレームワークを具体的に提案していかなければならない。

一般的に、人間は未来を予想しようとするときに、暗黙のうちに未来は現在の線形な延長線上にあると仮定していることが多い（＊文献10）。これでは、VUCA な時代を生きる児童は、暗い未来を予測してしまうかもしれない。しかし、そこから少し方向を変えて明るい未来を形作っていかなければならない。それは演繹的な未来予測ではなく、帰納的な未来洞察である。その際には、様々な困難が待ち受けているだろう。SDGs が示している持続可能な世の中になるよう様々な問題点を把握し、望ましい未来に向けて自分たちは何ができるのか考え、責任ある行動をとらなければならない。OECD（2018）は「新たな価値を創造し、対立やジレンマを克服しながら、責任ある行動をとる力を育成することが生徒エージェンシーに直結する」（＊文献2）と述べている。

創造的読解に至るまでには、イメージを読み、解釈し、吟味的に評価できる必要がある。写真等の読解力育成において、正しく読解し、解釈し、吟味的に読解することで社会認識が高まり、その後社会形成力育成、さらに創造的読解に迫ることが可能となる。よって、生徒エージェンシー育成のためには、創造的読解まで含まれた写真読解モデルが必要である。

4. 創造的写真読解モデルの構成要素

小原（2023）では、向山（1990）の雪小モデルを発展させ創造的写真読解モデル（図1）を開発した（＊文献11）。

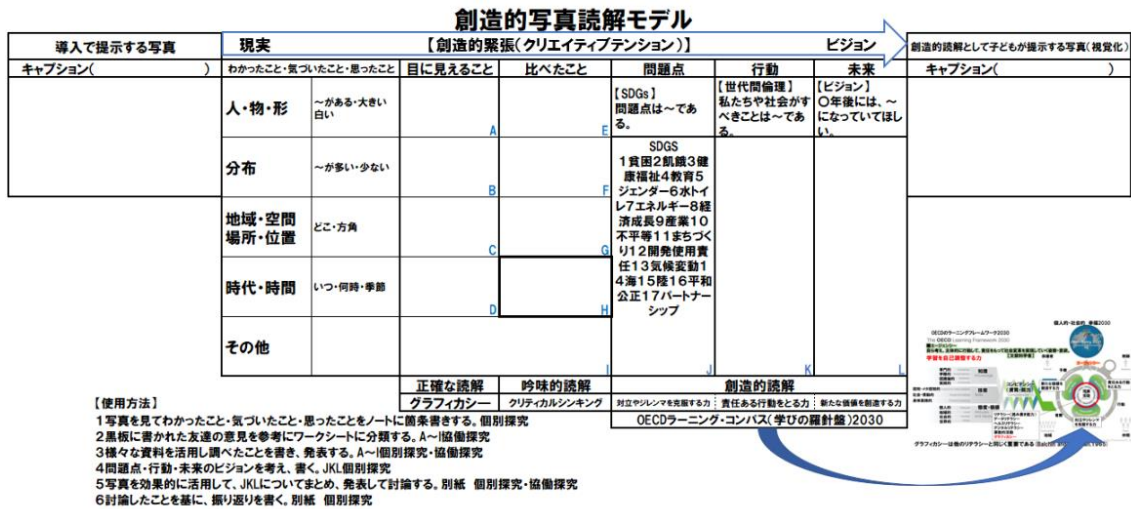


図1 創造的写真読解モデル

(筆者作成)

鷲田（2016）は、未来予測が演繹推論型の手法であり、現在の直線的な延長でしか未来を描くことができず、従来とは違う方向性の出来事が発生した時に、実際にどのような現象が発生するのかをシナリオ化する力が弱いと述べている（＊文献10）。対して、未来洞察については、帰納推論型の手法であり、突発事象の「芽」と言える微細な社会変化に着目して、その方向性を精密に議論することで、不確実な未来の兆しを捉え、視点の拡張を促すと述べている（＊文献10）。

現在の VUCA な時代に演繹推論型の未来予測を行うのではなく、創造的写真読解モデルは、帰納推論型の未来洞察を行う。その為には、まず突発事象の「芽」と言える微細な社会変化を見取る必要がある。社会の変化を見取る手段として、写真を活用したその地域の正確な読解が必要である。そして、読解したことが本当に正しいのか吟味的に読解する必要がある。吟味的に読解する過程で写真の地域の問題点や課題が見つかる。それが、突発事象の「芽」と言える微細な社会変化である。このように、地域の一部を映し出した写真の詳細な読解から地域の問題点を帰納的に見つけ出すシステムが創造的写真読解モデルの表頭である。帰納推論型の未来洞察を行うためには、詳細な読解と俯瞰的な読解を繰り返す必要がある。児童の学習過程においては、創造的写真読解モデルの左右を往復しながら学習を探究的に深めていくこととなる。

写真を正しく読解したり吟味的に読解したりする中で、現実を正しく理解することがまずは重要である。その上で、未来のビジョンを持ち、現実とのギャップを埋めていかねばならない。現実と未来のビジョンとのギャップには様々な問題が潜んでいる。例えば SDGs という視点で問題点を整理する中で、ビジョンに迫るにはどのような行動をとればいいのかが見えてくる。自分や社会がどのように行動すればいいのか考え議論する中で、責任ある行動の具体的プランを発見することができる。

OECD（2018）は、3つの変革をもたらすコンピテンシーとして新たな価値を創造する力、対立やジレンマに対処する力、責任ある行動をとる力を挙げている。本研究の創造的写真読解モデルでは、J・K・L番地に当たる問題点・行動・未来のビジョンがそれに相当するものと設定した。

5. 創造的写真読解モデルを用いたエージェンシー育成のための授業構成モデル

創造的写真読解モデル（図1）に沿った単元構造として、正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で学習を展開させる（図2）。

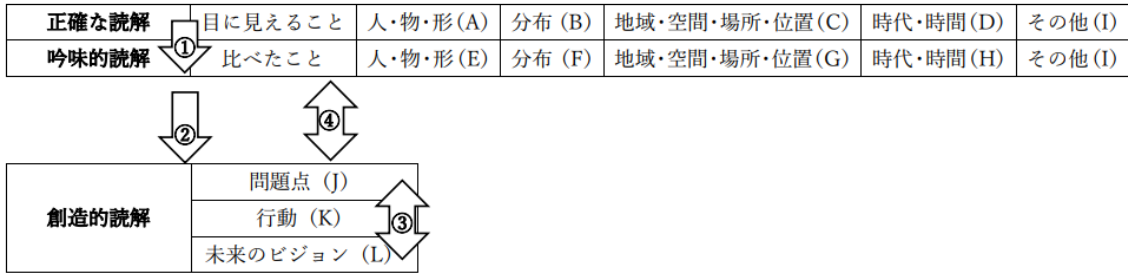


図2 創造的写真読解モデルに沿った単元構造（研究Ⅰ）

（筆者作成）

その際、まずは写真に写っていることについて多様な視点で読解を行う。次に、より正確に読解するために吟味的読解として他地域と比較等を行う（矢印①）。正確な読解・吟味的読解を十分行った上で創造的読解の問題点に進む（矢印②）。矢印②の接続については、岩田（1991）の概念探究過程から価値分析過程（＊文献9）への接続に依拠している。創造的読解内の問題点・行動・未来のビジョンにおいては、問題点を考え、未来のビジョンを創造し、そのための行動について意思決定していくものであるが、創造的緊張を働かせ現実的な未来のビジョンを創造させるために、往還的に探究する（矢印③）。さらに、創造的読解場面でさらに疑問に思ったことなどは、再度吟味的読解に戻り追究しなおす。よって、矢印④に関しても往還的な探究を行う。なお、児童の興味を引くために、可視化された有効な写真を中心に授業を展開し、探究過程においては他の資料（連続型テキスト・非連続型テキスト）も効果的に取り入れ学習を進める。

創造的写真読解モデルの活用方法として、導入時に写真を提示し、わかったこと・気づいたこと・思ったことをノートに箇条書きし、板書させることで、児童一人一人に情報が蓄積される。社会構成主義の考え方によれば、教室には様々な知識や考えを持った児童が存在する。そのような児童に対して、現在（場合によっては過去や未来）の写真を、正しく読解させることで、現在についての理解を深めさせることができる。さらに、他地域や写真には写っていないこととの比較や、疑問に思ったことなどに迫る吟味的なものの方により、よりメタ認知され、現実についての理解が深まる。

写真による効果的な導入により児童の興味関心を高め、正確で吟味的な読解を行う中で、もっと調べてみたいことや疑問が出てくる。児童が疑問を持った後、教科書や資料集、インターネット等を活用し、探究活動を行う。写真はビジュアルで可視化という点で優れており、他のデータや資料、例えばグラフ・表・文章などと連携しながら、知識を獲

得ることが可能である。このような情報が十分に蓄積されたうえで、創造的読解に向かう。

OECD が目指すエージェンシー育成には、対立やジレンマを克服する力・責任ある行動をとる力・新たな価値を創造する力の 3 つの変革をもたらすコンピテンシーが必要である。未来のビジョンを持つことにより、創造的緊張が芽生え、問題を明らかにし、行動意欲が持続される。さらに、責任ある行動をとることによって、未来のビジョンと現実とのギャップが縮まり、エージェンシーが育成されたことになる。

なお、本研究では小学校社会科第 4 学年「わたしたちの県（兵庫県）」を対象とした。創造的写真読解モデルは、写真の読解を中心として授業を展開するものである。ある地域の写真を提示し、読解しながら地域の問題点を発見した上で、その地域の未来のビジョンに迫り、社会の一員としてすべき行動まで考えるという学習展開である。そのため、自分達の地域に深く関わっている単元が望ましい。また、創造的写真読解モデルでは、複数の写真を組写真として扱い、複数の地域を比較することで、吟味的読解を行う。よって、扱う地域はある一定の広がりや比較対象となるものが適している。地域間を比較しつつも、写真に写っている地域に関わりのある単元として、第 4 学年「わたしたちの県（兵庫県）」を対象とした。

【単元計画】

次 数	時 数	創造的写真 読解モデル	授業の主な内容	主な資料
第 一 次	第 1 時	正確な読解 番地 A～D	・ 1 回目の生徒エージェンシー測定尺度アンケートを実施する。 ・ 同じ日の氷ノ山国際スキー場（養父市）と淡路花栈敷（淡路市）の写真を比較することで、兵庫県の土地利用について読解する。配布された教科書の写真の自力読解を行う。【診断的評価】 ・ 「あわじ環境未来島構想」や「未来につながる淡路島のくらし」から淡路島の土地利用における問題点・すべき行動・未来のビジョンについて考える。	・ 氷ノ山国際スキー場（養父市） ・ 淡路花栈敷（淡路市） ・ H31 年版東京書籍 4 年生社会科教科書 p 140、141 ・ あわじ環境未来島副読本 ・ 未来につながる淡路島のくらし
第 二 次	第 2 時	正確な読解 吟味的読解 番地 A～I	・ パフォーマンス課題を知る。 ・ 配布された教科書の写真について創造的写真読解モデルを活用しながら正確な読解、吟味的読解を行う。 ・ 写真を見てわかったこと、気づいたこと、思ったことをノートに箇条書きにする。 ・ 5 つ書けたら、黒板に書き、発表する。 ・ 自分の意見や友達の見解を創造的写真読解モデルにまとめる。【形成的評価】【ポートフォリオ】	・ H31 年版東京書籍 4 年生社会科教科書 p 146、147 ・ いかなごの水揚げ（淡路市）写真 ・ 創造的写真読解モデル
	第 3 時	正確な読解 吟味的読解 番地 A～I 問題点	・ ポートフォリオを見返しながら、播磨灘の海苔の養殖を中心に、学習を行う。 ・ 調べてわかったことや友達の見解などを創造的写真読解モデルに書き足していく。	・ 創造的写真読解モデル ・ 海苔の養殖（明石市）写真 ・ 神戸海上保安部ほか資料

本時	番地 J	・海苔の養殖の動画を参考に、兵庫県の漁業の問題点について考える。	
第4時	問題点 行動 未来のビジョン 番地 JKL	・兵庫県の様々な漁業について知る中で、播磨灘のいかなご漁の特徴や問題点・すべき行動・未来のビジョンについて考え、創造的読解を行う。	・創造的写真読解モデル ・兵庫県漁業協同組合連合会 SEAT-CLUB (2018) 瀬戸内海を豊かな海に～やせた海 瀬戸内海からの警告～
第5・6時	探究 創造的読解 番地 JKL	・創造的写真読解モデルを活用しながら、兵庫県の産業について調べ学習を行い、発表資料をまとめる。画像検索の方法を知り、グーグルスライドを活用する。	・創造的写真読解モデル ・兵庫県の漁業関係 各種書籍 パンフレット ホームページ 動画等
第7・8・9時	正確な読解 吟味的読解 創造的読解 番地 A～L	・創造的写真読解モデルを活用しながら、兵庫県の産業の問題点・すべき行動・未来のビジョンについて発表する。友達の発表について質疑応答を行い、学習を振り返る。【総括的評価】 ・2回目の生徒エージェンシー測定尺度アンケートを実施する。	・創造的写真読解モデル ・児童が作成した発表用グーグルスライド ・「あわじ環境未来島副読本ーみらいー」

IV. 授業実践の分析と考察（研究Ⅱ）

1. 分析方法

創造的写真読解モデルを活用した授業を開発し、2022年5月9日～6月10日にかけて、H県K市の小学校で、4年生を対象に授業を実践した。

創造的写真読解モデルを活用した授業構成理論（研究Ⅰ）に対応した生徒エージェンシー育成のための評価方法（研究Ⅱ）について述べる（図3）。

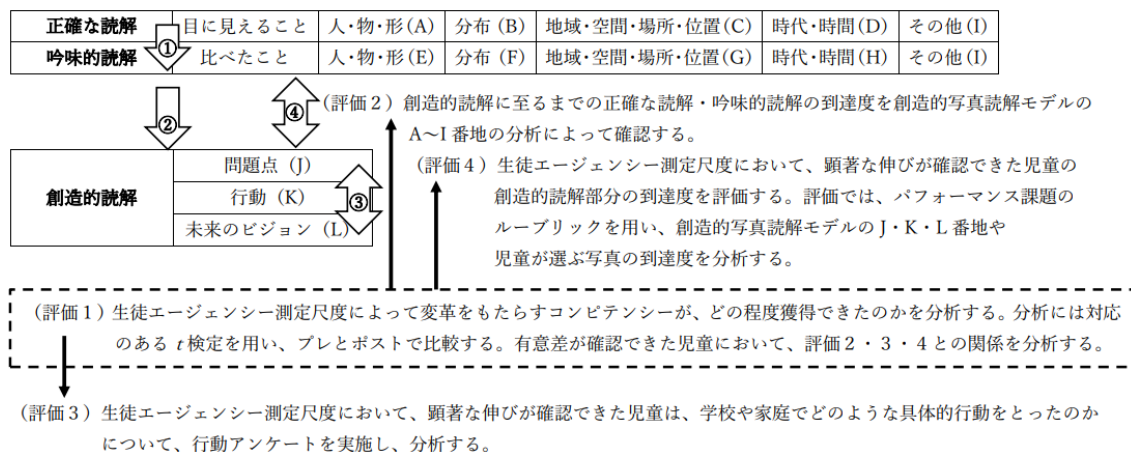


図3 生徒エージェンシー育成のための評価方法（研究Ⅱ）

（筆者作成）

まず、OECD（2018）が示した3つの変革をもたらすコンピテンシー（新たな価値を創造する力、対立やジレンマに対処する力、責任ある行動をとる力）を用いて、白井（2020）の定義を基に筆者が独自に開発した生徒エージェンシー測定尺度を活用し、プレとポスト

で3つの変革をもたらすコンピテンシーがどの程度獲得できたのかを分析する。この生徒エージェンシー測定尺度の分析においては、対応のある t 検定を行い、プレとポストでどのような項目で顕著な伸びが見られたのかを確認する（評価1）。

次に、評価1の量的分析を中心とし、それを補う量的質的分析として評価2、評価3、評価4と分析を行う。

評価2では、創造的読解に至るまでの正確な読解や吟味的読解の到達度を評価するために、創造的写真読解モデルのA～I番地内の意見の多様性や分布、さらに番地ごとの具体的な意見について創造的写真読解モデル使用前を「プレ」、使用後を「ポスト」として比較する。

評価3では、生徒エージェンシー測定尺度において、顕著な伸びが確認できた児童は、学校や家庭でどのような具体的な行動をとったのかについて、行動アンケートを実施し分析する。

さらに評価4では、生徒エージェンシー測定尺度において、顕著な伸びが確認できた児童の創造的読解部分の到達度を評価する。評価では、パフォーマンス課題のルーブリックを用い、創造的写真読解モデルのJ（問題点）・K（行動）・L（未来のビジョン）番地や児童が選ぶ写真の到達度を分析する。

2. 分析対象

分析対象は、H県K市の小学校の4年生3クラスとする。各クラス9時間の授業実践を行った。コロナ禍ということもあり、欠席者が多かったため分析対象に偏りが見られた。また、創造的写真読解モデルの対象・生徒エージェンシー測定尺度については、プレとポストによる調査であるため、プレとポストの両方とも出席した児童のみを分析対象（表2）とした。

表2 分析対象

分析対象	全員	創造的写真読解モデル	生徒エージェンシー測定尺度	パフォーマンス課題
4年1組	34	33	32	31
4年2組	34	31	28	26
4年3組	33	28	25	33
合計（人）	101	92	85	90

（筆者作成）

3. 生徒エージェンシー測定尺度の分析（評価1）

全9時間の単元における1時間目の導入時をプレ、9時間目をポストとして、生徒エージェンシー測定尺度に基づいたアンケートを実施した。本実践において、児童の生徒エージェンシーがどのように変化したのかを分析した。

単元の最初と最後に生徒エージェンシー測定尺度による調査を5件法で実施し、その結果を対応のある t 検定で分析した（表3）。

表3 生徒エージェンシー測定尺度1～9のt検定分析

コンピテンシー	番号	生徒エージェンシー測定尺度	p 値	判定
新たな価値を創造する力測定尺度	1	地域の問題点について、友達と協力しながら学習に取り組んでいる。	0.0048	**
	2	地域の未来について、目標を決めて学習に取り組んでいる。	0.0035	**
	3	学習を通して発見した新しいアイデアのマイナス面はないか慎重に考えている。	0.0066	**
対立やジレンマに対処する力測定尺度	4	地域の問題点について、複数の人の立場に立って考えている。	0.0114	*
	5	地域の問題点について、自分とは考えが違う友達の意見から、良さを見つけ出すようにしている。	0.0149	*
	6	地域の問題点について、実行可能な解決策を選ぶことに意識して取り組んでいる。	0.0001	**
責任ある行動をとる力測定尺度	7	地域をよりよくする話し合いの中で、自分の意見に責任をもって発表を行っている。	0.0088	**
	8	今まで学習してきたことを、自分から振り返るようにしている。	0.0309	*
	9	自分達がすべき行動について、大人と連携して学習に取り組んでいる。	0.0005	**

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

(筆者作成)

その結果、全9項目中6項目では高度な有意差 ($p < 0.01$) か、残り3項目でも有意な差 ($p < 0.05$) が確認できた。よって、本単元において生徒エージェンシー育成の兆候が示唆されたといえる。なお、85名の調査で2名の数値が低下した。該当児童2名に聞き取りを行ったところ、プレよりもポストの方が項目の意味がクリアになり、より正確に記入できたということであった。

9項目の中でも、特に有意差が顕著な項目は、6の「地域の問題点について、実行可能な解決策を選ぶことに意識して取り組んでいる。」と9の「自分達がすべき行動について、大人と連携して学習に取り組んでいる。」である。

項目6の実行可能な解決策は創造的写真読解モデルのJ番地であるSDGsの観点である「問題点」、項目9の大人と連携して行動を決定するはK番地である私たちがなすべき「行動」と対応している。児童達にとって、正確な読解、吟味的な読解により見つけ出した地域の問題点について、実現可能な範囲内でどのように行動すべきなのかを教師や保護者、地域の人たちと連携しながら決定する学習が必要である。本単元では、このような学習が豊富に組み込まれていることが一つの原因になり、有意差が顕著であったと推測する。では次に、創造的読解に至るまでの正確な読解や吟味的読解の到達度を評価2で分析する。

4. 創造的写真読解モデルA～I番地の分析（評価2）

評価2では、創造的読解に至るまでの正確な読解や吟味的読解の到達度を分析する。創造的読解が正確な読解や吟味的読解を十分行った上で行う読解方法であるため、まず、正確な読解・吟味的読解が十分行われたのかについての到達度を分析する。到達度については、社会的な見方・考え方を働かせながら写真読解することが重要であるため、児童の意

見の多様性を確認する。分析方法として、筆者作成の創造的写真読解モデルの使用前をプレ、使用後をポストとし、創造的写真読解モデルのA～I番地の効果を比較した。1時間目に創造的写真読解モデルなしでの児童の意見、2時間目に創造的写真読解モデルありでの児童の意見を記録した。プレは淡路市の淡路花栈敷の写真、ポストは洲本市のいかなご漁の写真である。プレとポストでの写真が違い、さらに、同じ児童に実施したため1回目
がトレーニングになっている可能性があるため、プレ・ポスト間の差異については論ずることができない。しかし、番地におけるプレでの児童意見の分布とポストでの児童意見の分布を比較検討することは可能である。下記が分析結果（表4）である。

表 4 創造的写真読解モデルの分析結果

読解レベル	番地	社会的見方	4年1組（33名）		4年2組（31名）		4年3組（28名）		4年全体（92名）	
			プレ	ポスト	プレ	ポスト	プレ	ポスト	プレ	ポスト
正確な読解（目に見えること）	A	人・物・形	100	111	83	42	75	162	258	315
	B	分布	30	115	33	91	32	117	95	323
	C	地域・空間・場所・位置	18	52	14	42	10	40	42	134
	D	時代・時間	1	51	0	53	4	51	5	155
吟味的読解（比べたこと）	E	人・物・形	0	50	0	52	4	17	4	119
	F	分布	0	37	0	8	0	25	0	70
	G	地域・空間・場所・位置	2	29	0	24	7	2	9	55
	H	時代・時間	0	52	0	32	2	77	2	161
	I	その他	1	28	6	71	25	8	32	107
合計			152	525	136	415	159	499	447	1439

（筆者作成）

写真を提示しての読解において、児童の意見はA番地に集中し、社会的見方の多様な意見を期待することができないということが分かる（図4）。

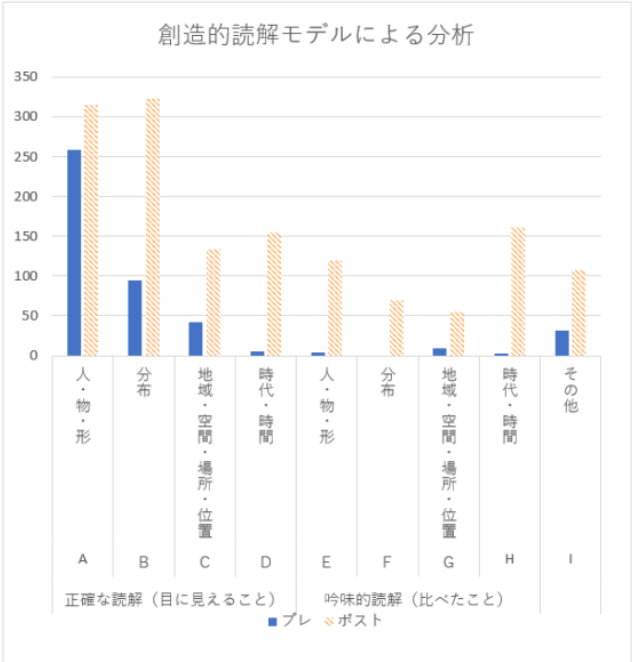


図 4 創造的写真読解モデルによる分析

（筆者作成）

創造的写真読解モデルを与えたポストでは、児童の意見が多様になったことが分かる。A番地の意見は変わらず高い値であるが、B番地の方が高い値が出た。つまり、創造的写真読解モデルを与えたことにより、今まで書くことができなかった社会的見方に挑戦したことが伺える。さらに、プレでは少なかった吟味的読解の値が増えていることが分かる。このことから、写真資料の読解において、創造的写真読解モデルの活用により、正確な読解に留まらず、吟味的読解の値も増加の兆候が示唆された。吟味的読解を確実に行うことで、創造的読解へと無理なく進むことができる。

さらに、A～I番地内の児童の意見（全1439）を質的に分析した。質的分析としてKJ法を用い、各番地内において似た意見をまとめ概念を作成した。質的分析で分かったことは、例えばA番地の場合、ポストでは「物の名称」だけではなく、「形・大きさ・色」などを関連させた記述がみられた。次にI番地で特徴的であったのが、「聴覚・嗅覚・触覚に関する意見」「仕事内容や状況に関する意見」「SDGsと関係ある意見」である。このようにI番地の「その他」の意見は、写真に写っていることを頼りとして、状況をよりリアルに想像しているものが多いことが分かった。

5. 行動アンケートによる具体的な行動の分析（評価3）

評価1で、地域の問題を自分ごとと捉え、社会に積極的に関わるという項目に有意差が確認できた。では、児童たちは具体的にどのような行動をとったのであろうか。授業中には図書室の本や一人一台端末により、探究の時間を繰り返し確保した。しかし、社会に積極的に関わるためには授業中以外の行動を観察しなければならない。

そこで、単元終了時に「行動アンケート」を実施した。「行動アンケート」の項目は、以下の通りである。

- 1 授業中、友達に対してどんなことを協力しましたか？
- 2 学習中、どんなことを積極的に頑張りましたか？
- 3 学習中、友達の発表のどんな良い所を見つけましたか？
- 4 学校や家庭で、自分からどこにどんな資料を探しに行きましたか？
- 5 学校や家庭で、だれにどんなことを聴きましたか？

評価1で行った生徒エージェンシー測定尺度の項目6・項目9において、顕著な伸びが認められた児童（83名）の行動内容を行動アンケートにより抽出した。さらに、行動項目ごとに分類し、人数を調べた（表5）。

行動アンケートの結果を分析した結果、家族に聞いた人数が23名、教師に聞いた人数11名とあるように、生徒エージェンシーの測定尺度の9項目にある「大人との連携」ができていているという点である。児童がなかなか一人では取り組めない問題も大人と連携することによって可能になっている。それも大人の知識を一方的に受けるのではなく、大人と一緒に調べたり、現地に行ったりし

表5 行動項目における人数

行動項目	人数
実際に海苔店に行った。	3
海苔店に行く計画を立てた。	5
家族が海苔を買ってきた。	1
友達が買ってきた海苔をもらった。	1
図書館に行った。	4
家にある海苔について調べた。	2
家族に聞いた。	23
教師に聞いた。	11
新聞を読んだ。	1
関連のあるテレビを見た。	3
インターネットで調べた。	18

（筆者作成）

ていることが分かった。実際に近所の海苔店に行ってみたり（3名）、行く計画を立てた児童（5名）や家族が買ってきた海苔や友達に買ってきてもらった海苔を食べたり調査したりした児童（2名）も現れた。これは、対象児童の約 12%であり、このような社会に積極的に関わった児童は授業中の発言も多く、創造的写真読解モデルへの記述や最終発表の内容も達成度は高い傾向にある。また、評価 2 で行った正確な読解・吟味的読解において、意見の量や多様性が顕著に表れた児童ほど積極的な行動をとっていることも分かった。

本単元で扱った兵庫県の漁業の問題点は長年解決しておらず、大人が考えても難しい問題である。そのような難問に大人の中に入って、大人の意見を聴くだけではなく、自分で調べ考えながら、意見を交流し協力する児童が見られた。このように、社会の一員となって行動することがエージェンシー育成には必要になる。

6. パフォーマンス課題についてのルーブリックによる創造的読解部分の分析（評価 4）

生徒エージェンシー測定尺度の有意差を分析した後、具体的な行動についてアンケートを実施し、どのような行動を児童は学校や家庭でとったのかについて分析した。次に、生徒エージェンシー測定尺度において、顕著な伸びが確認できた児童の創造的読解部分の到達度を評価する。評価では、パフォーマンス課題のルーブリックを用い、創造的写真読解モデルの J・K・L 番地や児童が選ぶ写真の到達度を分析する。

「写真資料を効果的に活用しながら、創造的読解を行い、問題点・すべき行動・未来のビジョンについてプレゼンしよう」というパフォーマンス課題による児童の発表について、ルーブリック（表 6）に基づき観点別評価を行い、点数化し、評価を行った（表 7）。ルーブリックは下記に示す 4 観点の観点別評価とし、評価の合計点数によって A・B・C の評価を行う

ものである。創造的写真読解モデルの J 番地が SDGs の視点に立った問題点、K 番地が私や社会がすべき行動、L 番地が明るい未来のビジョンである。さらに、創造的写真読解モデルの右端には、創造的読解として児童が提示する写真の欄を設けている。この欄は J・K・L と対応した写真を見つけ添付する欄であ

表 6 パフォーマンス課題分析ルーブリック

分析対象	問題点 (J)	行動 (K)	未来のビジョン (L)	児童が選ぶ写真
分析枠組	SDGs の観点	私や社会がすべきこと	明るい未来のイメージ	可視化
3 評価 創造的読解力育成の兆候を十分見取ることができる。	SDGs の視点を複数使って問題点を指摘できている。	JL との関係性が見られ、社会がすべきことについて記述できている。	JK との関係性が見られ、実現可能な未来のビジョンについて記述できている。	社会的見方の要素が豊富で KLM との関係性が見られる写真を選択できている。
2 評価 創造的読解力育成の兆候をおおむね見取ることができる。	SDGs の視点を使って問題点を指摘できている。	自分がすべきことについて記述できている。	未来のビジョンについて記述できている。	KLM との関係性が見られる写真を選択できている。
1 評価 創造的読解力育成の兆候を見取ることができない。	SDGs の視点を使って問題点を指摘できていない。	すべきことを記述できていない。	未来のビジョンについて記述できていない。	KLM との関係性が見られる写真を選択できていない。

* 上記の表 4 観点について、1・2・3 の観点別評価を行う。

* 観点別評価の点数により、下記の表の内訳の通り、A・B・C の評価を行う。

評価	評価の合計（点）	評価の組み合わせ例
A 評価 創造的読解力育成の兆候を十分見取ることができる。	10～12	3333,2233,1333
B 評価 創造的読解力育成の兆候をおおむね見取ることができる。	7～9	2223,1222,1123
C 評価 創造的読解力育成の兆候を見取ることができない。	4～6	1113,1122,1111

（筆者作成）

り、未来のビジョンを可視化するねらいがある。

4年生全体の評定は、A 評定 27 名・B 評定 62 名・C 評定 1 名の比率となった。4年生全体の観点別平均評価については、最高 3 ポイント中、問題点(J 番地)が約 2.3 ポイント・行動 (K 番地) が約 2.4 ポイント・未来のビジョン (L) が約 2.2 ポイントと、どの観点においても高レベルの評価が確認できた。中でも、行動 (K 番地) の値が一番高かった。対して、児童が選ぶ写真においては約 2.1 ポイントと他の 3 観点に比べてやや低い値が確認できた (表 7)。理由としては、J・K・L の内容と因果関係のある写真を見つけることが難しかったからである。

A、B、C の人数比

から分析すると、欠席児童以外は、生徒エージェンシー育成の要素でもある友達との協力や大人との交流を単元の中に導入したため成果物を完成させることができ、ループリックの評価 2 以上を獲得で

きた。中でも、行動 (K 番地) の値が一番高かったということは、「社会や自分がすべきことについて記述できている」児童が多かったということである。このことは、エージェンシー育成の為の 3 つの変革をもたらすコンピテンシーの中でも、「責任ある行動をとる力」の育成に繋がったということになる。

7. 分析のまとめ

研究仮説である「正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で写真を読み取っていけば、エージェンシー育成に繋ぐことができるであろう。」を検証するために、生徒エージェンシー測定尺度を開発し分析した。その結果、地域の問題点の実行可能な解決策を考え、取るべき行動について大人と連携して考えるという部分に、特に有意な差が確認できた。さらに、具体的にどのような学びを行ったかについて行動アンケートを取った結果、探究の仕方に多様性が見られ、家に帰ってからも大人と連携した学びを行っていたことが分かった。分からないことを大人に聴くのみに留まらず、自分で調べ、自分の意見を持ち、大人と意見を交流することができた。このような自己調整的な学びは、創造的写真読解モデルを中核に据えた授業構成理論に表れている。社会的な見方・考え方を働かせながら正確な読解を行い、より正確に読解するために吟味的読解を行った効果については、創造的読解写真モデルの A～I 番地の分析において確認できた。さらに、創造的読解内の「問題点」と「未来のビジョン」とを繋ぐ部分として設けた世代間倫理でもある「すべき行動」を考えることが、「実現可能な未来のビジョン」について提案することに影響を与えていることが分かった。これら 3 点 (問題点・行動・未来のビジョン) の連携の効果については、パフォーマンス課題のループリックでも確認できた。

表 7 パフォーマンス課題についてのループリックによる評価評定

番号	創造的読解・番地	評価の平均値			
		4 年 1 組 (31 名)	4 年 2 組 (26 名)	4 年 3 組 (33 名)	4 年 全体 (90 名)
1	問題点 (J) SDG s の観点	2.3125	2.307692308	2.242424242	2.28753885
2	行動 (K) 私や社会がすべきこと	2.387096774	2.5	2.424242424	2.437113066
3	未来のビジョン (L) 明るい未来のイメージ	2.129032258	2.230769231	2.272727273	2.210842921
4	児童が選ぶ写真	2.032258065	2.115384615	2.03030303	2.059315237
評定					
	A	9	7	11	27
	B	22	19	21	62
	C	0	0	1	1

(筆者作成)

V. 研究の成果と課題

本研究は、写真読解を題材にして、生徒エージェンシー育成に繋がる小学校社会科授業を開発し（研究Ⅰ）、その効果を検証する（研究Ⅱ）というダブルフェーズのデザインであった。よって、本研究の成果も以下の2点に整理される。

①創造的写真読解モデルを活用した授業開発（研究Ⅰ）における成果

VUCA な時代に生きる児童達が明るい未来を創造するためには、どのような教育が必要であるかという問題提起から本研究はスタートし、社会科教科書の半分以上を占める非連続型テキストの中でも、もっとも占める割合の高い写真資料の読解をどのように行えば効果的であるのかについて研究してきた。その中で、OECD ラーニング・コンパス 2030 や OECD ラーニング・フレームワーク 2030 の生徒エージェンシーに着目した。OECD (2018)によると、生徒エージェンシーを育成するためには、従来のコンピテンシーに加えて、「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」「新たな価値を創造する力」の3つの「変革をもたらすコンピテンシー」が必要である。3つの「変革をもたらすコンピテンシー」のためには、正確な読解だけでなく、吟味的読解や創造的読解まで迫る必要があるのではないかというのが、本研究の問題意識である。そのためには、正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で写真読解を行えば、生徒エージェンシーに繋ぐことができるであろうという仮説を持った。正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順での写真読解には、どのようなものが存在するのかについて先行研究を整理した。特に、向山

(1990)の「雪小モデル」は正確な読解・吟味的読解において効果的であることがわかった。しかしながら、向山(1990)においても創造的読解までには至っておらず、新たな写真読解モデル開発の必要があった。写真読解モデルの表側には、社会的な見方・考え方

(小学校学習指導要領)、「地理探究」から抽出した枠組み(高等学校学習指導要領)、地理学5大テーマ、地理教育国際憲章(1992)からキーワードを抽出した。さらに、表側にはクリエイティブ・テンションの考え方を活かし、正確な読解(目に見えること)・吟味的読解(比べたこと)・創造的読解(問題点・行動・未来のビジョン)を配列し、創造的写真読解モデルと命名した(*文献11)。そして、創造的写真読解モデルを用いたエージェンシー育成のための授業構成理論を構築し、小学校社会科第4学年「わたしたちの県(兵庫県)」を対象とした授業を開発した。

②創造的写真読解モデルを活用した授業の効果検証（研究Ⅱ）における成果

創造的写真読解モデルに沿って授業を展開すれば、生徒エージェンシー育成に繋がるかを小学4年生で検証した。まず生徒エージェンシー測定尺度を開発し、単元の前でアンケートを実施し、変化を分析した(評価1)。次に、創造的写真読解モデルを活用すれば、写真読解にどのような変化が表れるのかを検証した(評価2)。そのために、創造的写真読解モデルを使用しない場合の写真読解のデータと使用した場合のデータを取り、比較検証を行った。また、生徒エージェンシー測定尺度において、顕著な伸びが確認できた児童は、学校や家庭でどのような具体的行動をとったのかについて、行動アンケートを実施し分析した(評価3)。さらに、創造的写真読解モデルを活用して学習した上で、パフォーマンス課題を行わせ、開発したループリックに照らしながら児童の到達度を分析した(評価4)。生徒エージェンシー測定において、対応のあるt検定で分析した結果、全ての項目で有意な差が確認できた。全9項目の内訳は、6項目で高度な有意差($p<0.01$)、

残り 3 項目で有意な差 ($p<0.05$) であった。よって、本単元において生徒エージェンシー育成の兆候が示唆されたといえる(評価 1)。次に、正確な読解や吟味的読解を分析した評価 2 では、創造的写真モデルを活用すれば、児童の意見が多様化され、創造的読解にスムーズに接続できたことが分かった。また、評価 3 の行動アンケートから、大人と連携しながら学習を進めることが生徒エージェンシー育成には必要であることが分かった。そして、評価 4 では、創造的写真読解モデルを効果的に活用しながら学習を進めた児童ほどルーブリックによる評価も高いことが分かった。

しかしながら、本研究の課題として、正確な読解・吟味的読解・創造的読解の順で写真を読み取っていけば、エージェンシー育成に繋ぐことができるということは分かったが、児童自らが創造的写真読解モデルを使いこなし、学習を自己調整させるまでには至らなかった。今後、3 年生から 6 年生まで系統立てた学校ぐるみのカリキュラムを作成し、学校教育現場で引き続き検証を行いたい。

VI. 文献

- 1 白井俊 (2020) : 「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来: エージェンシー、資質・能力とカリキュラム」、79~98、ミネルヴァ書房
- 2 OECD (2018): Education 2030, The future of education and skills, 1~23
- 3 堀田龍也・新保元康・佐藤正寿 (2015) : 「社会科の達人が推薦する社会科重要資料の指導法 30 選 5 年生」、6~7、教育同人社
- 4 須田坦男・中村治行 (1964) : 写真観察における子供の観察力の実態とその発達段階、新地理 11 (4)、64~74
- 5 鳥海公(1990) : 野外観察力、写真読解力及び地形図の読図力の発達と育成、新地理、37 (4)、40~47
- 6 安岡卓行 (2009) : 地理写真を使用した読解力の育成に関する実証的研究、新地理、57 (3)、14~25
- 7 鈴木明憲・村山朝子 (2016) : 地理学習における写真資料活用力の発達プロセスー小・中学生の読解的側面に関する調査ー、茨城大学教育学部紀要 (教育科学)、65、1~14
- 8 向山洋一 (1990) : 社会科授業雪小モデル (案)、教育トークライン 10 月号、2~3
- 9 岩田一彦 (1991) : 「小学校社会科の授業設計」、57~63、東京書籍
- 10 鷺田祐一 (2016) : 「未来洞察のための思考法 シナリオによる問題解決」、1~45、勁草書房
- 11 小原嘉夫 (2023) : エージェンシー育成のための読解力を形成する小学校社会科教科書に関する研究、令和 3 年度公益財団法人教科書研究センター大学院生の教科書研究論文助成金論文集、131~140

VII. 付録

本研究は、兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻に提出した教育実践研究報告書の一部に加筆修正したものである。教育実践研究報告書を付録として添付する。